琉球気象台を訪ねて

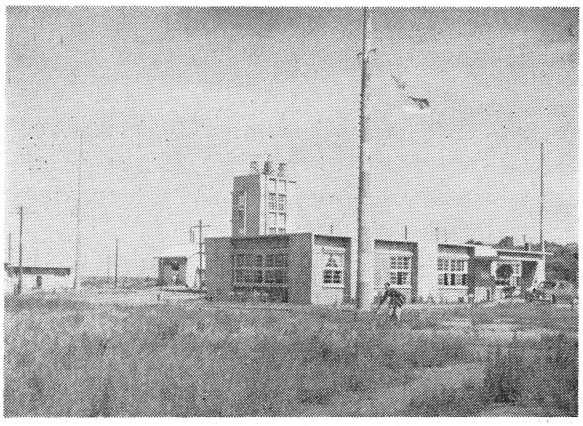
大　後　美　保

京浜国道より立派ではないかと思われる道を走った車は，赤土の間に大きな石がごろごろしている急な坂を昇って琉球気象台の玄関前に停った．玄関には今朝3時に飛行場に迎えに来てくださった台長を始め，何人かの気象台の職員が出迎えてくれた．飾り気はないが，小じんまりとした，鉄筋コンクリートのがっちりとした庁舎である．庁舎の大きさは，内地の地方気象台程度のものであるが，敷地はかなり広い．気持のよい広い部屋が講師用の控室として用意されていた．ここで一応主な職員の方々と挨拶してから，風力塔へ登ってみた．

飛行機は暗いうちに着いたし，その後はタクシーでホテルへ行き，ホテルから気象台へ来たので，その辺の模様は全くわからなかったが，風力塔から見ると那覇の市街が一望に見渡され，気象台のある丘の直ぐ下には泊の港があり，遙か遠くに那覇港，またその先に小録の飛行場へ通ずる道路が見え，だいたいの地形をつかむことができた．“あすこにみえるのがもとの気象台です”と台長が教えてくれたが，前に来たことのない私には方向だけわかって，どの建物だかはっきりわからなかった．その後，もとの気象台の近くを通り，ああ，あれかとわかった次第である．写眞でみると現在の琉球気象台より戰前の気象台の方がやや立派である．もとの気象台は那覇港の南側の丘稜上にあり，現在の琉球気象台はそれより那覇の市街をはさんで，北の丘稜の上にある．那覇市の中心は戰前の那覇市より，山寄となり，更に眞和志市，首里市と街が山の上まで続いている．西の方をみると，気象台の横を港の方から北の方へ通ずる立派な道路が走っていて，この道路をはさんだ向側の丘の上には米軍家族の立派な住宅が建ちならんでいる．芝生を敷きつめたなかに，かなりな余裕をもって建ちならんでいるコンクリートの立派な住宅，ここで始めて，ああ基地沖縄に来ているのだという気持がよびおこされた．

“あの高いところが首里で，あすこに向って米軍が攻撃し，激戰が行われたのです”と説明されても，現在の状況では当時の激戰を偲ぶこともできない．“那覇から首里にかけて，戰前にはもっともっと樹があったのですが”そういわれてみると，見渡すかぎり大きな樹はない．なるほど激戰であったのだなとうなずけた．

気象台の構内には，観測露場はもちろんだが，地震計室，ゾンデ準備室，研修所，官舎などがある．



第1図　琉球気象台，この写眞の左手に気象観測露場があり，その先がづっと低くなって泊港に臨む．

気象台の定員は 43 名で，各測候所の定員はそれぞれ南大東島 19 名，石垣島 21 名，宮古島 22 名，西表島5名である．そして気象台長は，公務員としての最高給の15級で，無線職の初任給は 3 級 2 号であまりよくないが，気象職の初任給は6級1号で他の職場の公務員にくらべるとよいようである．

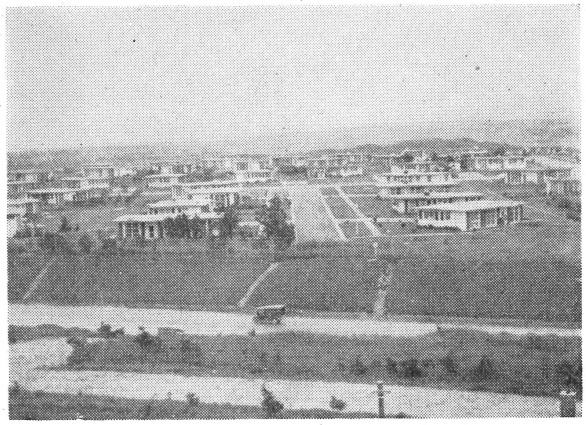
気象職の初任給の俸給は約 12,000 円（内地円に直して）で，上の俸給は内地の大学卒の初任給 8,700 円よりかなりよいようにみえるが，いろいろな手当や，税金などを考えに入れると内地よりわずかによい程度である．

次に物価を考えると，食糧品が内地よりやや高いが，暖地なので燃料や衣料は内地ほどいらないので，あれやこれやを考えると，だいたい沖縄の公務員の給与は内地と大同小異であるとみてよかろう．

ただ非常にちがうことは上下の開きが小さいということである．内地の公務員の俸給は，最高と最低の比が15対1ぐらいであるが，沖縄では4対1ぐらいであるから，低給者は優遇されているが，高給者で子供の多い人などは内地より苦しいのではないかと思う．また一般会社や軍作業などに勤めている人々の給与も，公務員の給与とそう大きな開きがないことも，内地とちがう大きな点のように思われる．

それでも若い人など，“とても遊ぶ余裕はありません”といっていたが，那覇の街に東京あたりに多いいわゆる喫茶店がほとんどみられないところをみると，実際に沖縄の若い人にはそのようなところで，金と時間を浪費する余裕がないのであろう．

沖縄へ着いた翌日の5月 28 日は土曜日であった．この日は9時に那覇を出発，自動車で北部地区の視察に出かけた．中央高台を縦走している道路を通って，沖縄本島のもっともくびれているところにある石川市に出た．ここまでは米軍の施設，施設といっても米軍人の住宅や，広々としたゴルフリンクが続いている．美しい芝生



第2図　琉球気象台より東をみれば，写眞に示すような米軍人住宅がたちならんでいる．手前の坂道が気象台へ登る道．

の中に，立ちならぶ住宅，ところどころにテニスコートがあり，およそいままで私たちが考えていた要塞という観念とはほど遠いものがある．

石川市は戰爭の際，避難民を米軍が收容したところで，そこに居ついた人々で市ができあがったもので，いわばこの市は戰爭の落し子である．石川市は東海岸金武湾に臨み，景色がよく，ここに米人の海水浴場がある．

石川市より，しばらく東海岸に沿って進み，途中で島を横断して西海岸に出て名護町に至る．名護町は北部では最も大きい町で，この町も戰爭ですっかり燒かれたが，もうすっかり回復している．那覇市から名護町までの約 50〜60 km というものは，東と西の海岸に沿って立派な道路が走っている．名護には北部の農事指導所があり，丁度展示会が開かれていて美事な南瓜やマンゴーが陳列されていた．農產加工品の並んでいるところで，二人の婦人が，これを造るにはこうした方がいいとか，いろいろ熱心に話していたが，全体からうける空気として向上の熱意にあふれているものを感じた．

保温折衷苗代の見本が造られていたが，こんな暖かいところでも1期作に保温折衷苗代が役立つときいて驚いた．田や畑は内地の農作物と大差ないが，一旦果樹園に入ると内地のそれとは全く趣きがちがう．バナナマンゴー，パイナップルといった熱帶原產のものが非常に多い．名護より更に北にある，伊豆味の果樹試驗地，吳我山にある尙家が經營している桃原農園などをみたが，これらはたいしたものではなかった．北部は平地が少いので，果樹にたよらなければならず，内地の瀨戸内海地方などからみると，もっともっと開拓してパイナップルなどを栽培する必要があるように思われた．この辺にはビンロウ樹や蘭類など熱帶性の植物が多く，農家の近くには福木という樹をうまく利用した防風林がよくみうけられる．福木は椿のようにつやのある葉を持った，かなり丈の高い樹で，防風林としては好適である．

名護では双葉ホテルに泊ったが，このホテルは小ざっぱりしていて，内地の旅館とほとんどちがいなく気持がよかった．

名護から北に進むと，舗裝してないので，土質の関係で雨が降ると非常に道が悪くなる．予定としては，塩屋の米軍蔬菜園までいくことになっていたがあまり道が悪いのでやむをえず途中で引返さざるを得なかった．

那覇市から名護町まではバスが，かなり頻繁に出ている．バスはだいたい日本製で，タクシーは米国の車が大部分を占め，小型はほとんどみられない．車は右側通行で交通規則をよく守るので気持がよい．

その後，講義のあい間に，中部地区と南部地区を視察した．

蔬菜や花等を研究している中部の農事指導所を訪ねたが，これはもとは那覇にあったものが，戰後胡差の山の中に移転したのだそうだ．ここでいろいろ話あったが，そのうちで，馬鈴薯が温度が高過ぎてうまくできないので，何かうまい工夫はないかという話が出た．これは人工微気象の問題で，果樹園や他の農作物と組合せて栽培することや，地面をマルチングする方法など，思い浮ぶ意見を述べてみた．この他，このような暑いところでも微気象を利用する問題がいろいろあるとは今まで気がつかなかった．

首里のもとの城跡には大学と放送局がある．以前の首里を知らないので，ここは戰前のおもかげがまったくないのだといわれても，一向ぴんとこないが，博物館で戰前の写眞を見て，なるほどと一驚した．

戰爭中，ここに司令部があり，軍の命令で最初に引上げて陣取った気象台の位置を教えてもらった．“ここから発信すると，ほらあの山合からすぐ大砲を打ちこまれるので困りましたよ”“この橋も当時ありました”などと案内され，私は一生懸命当時の模様を頭に描こうと努力した．もう砲弾でくずれおちた山肌も草におおわれた

（28 頁へつづく）

第3図　右手の小高いところに見える石柱のところが戰時中，気象台職員が最後に集結したところ．

（13頁よりつづく）

り，丈の低い灌木が生えたりしている．首里の琉球大学は，なかなか立派なもので，寄宿舎など，内地の大学でもみられないほどのもので，鉄筋コンクリート三階建のものが二棟ある．

南部地区の視察，これは全く戰跡の視察に終始している．案内する人も当時を憶い起し，あまりよい気持がしないようだが，聞くこと，見るものただ悲惨なことばかりである．それでも，南部で最大の街である糸満など完全に回復しているし，農家もどうにかもとどうりの生活をしているようだ．戰に敗れて山河ありというが，山河ばかりでなく人間の生活力の偉大さにうたれる．

姫百合の塔，これはあまりに有名であるからここではふれないが，そこからほど遠くないところで，本道から150米ほど入った，北東側がやや小高くなったところに径2寸ぐらいの小さな石柱が立っている．ここが気象台職員が南部におしつめられ，最後に集結した場所である．当時19名であったが，内1名は負傷して農家に倒れていたところを米軍に救われ，他の18名は全部戰死してしまったそうである．ここでは我々の仲間に心から哀悼の意を表した．7月1日の琉球気象台の記念日には一同で御参りにくるそうだ．また最近琉風の碑を建てる計画がすすめられている．

南部地区視察後はなんとなく気分が重かった．まだまだ沖縄について書きたいことが山ほどあるが，紙面にも限りがあるのでこのくらいにしておく．ただ最後につけ加えたいことがある．“沖縄が日本に復帰することができなければ，せめて気象台だけでも日本に帰属することはできないだろうか，そのように努力してもらいたい”というようなことを何人かの人々から聞いた．これはただ気象台職員だけの念願ではなく，沖縄の人のたれでもが持っている気持のようである．

しかし，現在の内地と沖縄の社会情勢を比較してみると，内地の人より沖縄の人の方が不幸であるとは決していえない．戰前にくらべると沖縄の生活の向上はたいしたものであり，一般人の生活態度が眞面目で，自動車強盗も，暴力カフエーも，疑獄事件もなく，米は内地より一足先に自由販売となっている．これらを考えるとき，私たちは何か反省させられるものがある．

（中央気象台）

（2頁よりつづく）

常次博士＝震研），太陽活動並に経緯度（宮地政司博士），現地計画（未定）

諸外国の計画をみると気象，極光および夜光，電離層の三つは殆んど共通している．航空写眞測量は観測年の計画には全然ないけれども殆んど各国とも実施する模様で，中でも米国は地上基準点の天測をも行い変歪修正作業も確実に行うようであり，地理調査所長武藤勝彦博士と共に日本の航空写眞測量の創業時代を経験した筆者には感概が深い．

地磁気測量は多分日本で最も深い経験をもつ地理調査所が実施することになろう．これらの他に海洋，重力，地震，地理，地質等の観測が行われる．

嘗て1911アムンゼンが南極を極めてから，1947バード少將の率いる約4,000人の探險隊が生物や人間の耐寒度まで調査した探險までの間にも夥しい探險が行われた．今回の計画でもソ連は海岸から極までの中間に三つの基地を設定して極まで到達する計画であるそうである．英国はヒラリーを隊長として隅なく空中偵察を行うという．

1957～58にわたり各国が南極大陸において繰り拡げる壮大なページエントはどんなものであろうか．

（中央気象台）

（23頁よりつづく）

論者はこうのべた後でいくらか気になるとみえて「気候学は時間的に大規模な平均をとるから違つた性質をもっていて，必ずしも全く気象学に解消されるかどうかは問題であると思う．しかし解消させるよう努力すべきです」とのべられた．しかしこの考え方は全く逆なのではないか．他の基礎となる学問に解消したり，これを使つて説明したりするこは，ムダな努力をしないためには勿論必要なことであろうが，新しい対象に対しては概念の拡張や一般化がたえず行わるべきものであって，気候現象というべきものがあるならそのような現象における特別な法則性なり，機構なり，特種性を見出すべきが第一であって，既存の概念に解消することや，それを使つて説明することよりも，たえずこれからはみ出すことが学問の発展のためには大切なのではないか．

4．気候に関心を持った多くの人々が，各自問題を持ちよって熱心に討論されたことはたいへん尊いことだとは思うが，学問の発展のためにはもう少し現状を否定するような討論や批判が出てもよいのではないだろうか．上にのべたような半ば揚足とりと思われるような論議も少しは必要なのではないか．以上雜誌に掲載された文面からだけの論評であるから，実際の成果はもっとちがつたものであったかもしれないので，もし大へん誤解しているような点があつたら御ゆるしをねがいたい．